

連邦検事が私を起訴するのは真実を隠蔽したいからだ

トレバー・アーロンソン (『恐怖工場：FBIが生産する戦争』(The Terror Factory: Inside the FBI's Manufactured War on Terrorism). インターセプト寄稿ライター) 著、The Intercept, 2024年6月20日
脇浜義明訳、田中一弘補訳 *脚注は訳注

連邦検察は私の報道を攻撃した——それは情報を国民から隠すために、である。

バイデン政権が本気で報道の自由を守ろうとするなら、ワシントンの当局者はデトロイトの連邦検察と厳しい対話をした方がいいかもしれない。



デトロイトのセオドア・レヴィン連邦裁判所。(Photo: Bill Pugliano/Getty Images)

これは私が報道し終わっていない記事に関する物語である。私がテロ事件裁判を取材して報道するのを連邦検事たちがやたらと注目して、最新の裁判所への提出書面によれば、私を「不適切な動機」を理由として起訴したのである。私が通常の取材・報道の中でテロ容疑者となにか結託をして、「陪審員を偏見で染めて裁判に公平性を破壊している」と言うのだ。

6月20日、デトロイト地方裁判所での証拠尋問のテーマはこのような危険な主張である。

私のこれまでの報道は潜在的な憲法違反を示唆している。司法省の私への攻撃はあるがまに見なければならぬ——それはバイデン政権による報道への恐るべき攻撃である。大統領は自分の政権は世

界中の報道の自由を擁護していると誇らしげに語るが、彼の司法省の提出書類は、根拠のない仮定と前後関係から乱暴に切り離した発言の都合好い寄せ集めに基づく私への攻撃である。どうやら検事たちは、私が公共の利益のために報道活動をしているという理由だけで、私の攻撃に打って出たように見える。(インターセプトの弁護団はジョナサン J.C. グレイ地方裁判所判事に文書を提出した。弁護団も6月20日の証拠尋問に出廷してくれる)

政権の私への攻撃の内容はショッキングではあるが、それ自体は驚くことではない。私が取材していた裁判は FBI の行為に関する厄介な問題と絡んでいて、去年連邦検事は私が取材で被告と接触したのを書面や法廷審問で苦情を申し立てた。

これまでの私の報道はこの裁判には連邦及び地方法執行官の間に問題がある振る舞いがあったことを示唆した。数年間にわたる人権侵害的な監視活動(結局何の証拠も発見しなかった)や憲法違反の可能性が高い行動など。(裁判の中でそれに関して質問が行われたが、検察側はすぐには応じなかった)

バイデン司法省は私の報道活動を止めようと、私の報道活動には隠された動機があり、一般の報道活動ではないというとんでもない言いがかりで私を責めた。— そういう非難を真実を国民から隠す手段に使ったのである。

FBI が地方の強盗事件を捜査？

この事件への私の関わりは5年前、私がこれに関連したテロ事件の取材をしている頃に始まった。私は、シリアへ行ってイスラム国テロ集団に入った米国人のラッセル・デニソンとひそかに接触して取材した。デニソンは、2019年のシリア東部への空爆で死ぬまで、ほぼ半年間、数時間の録画を送り、いわゆるカリフ制が次第に崩壊していくとなかでの自分の生活と ISIS との関りを説明してくれた。彼の録画と私の取材はインターセプトのオーディオ版として8部編成のドキュメント・ポッドキャスト『アメリカン ISIS』となった¹。

デニソンの死後、私は彼が録画の中で述べた人を含め、彼の知人を数か月かけて探した。その一人がミシガン州に住んでいたイラク生まれのほっそりした人物アウス・ナセルであった。

ナセルにも自分なりのストーリーがあった。彼は9・11テロ攻撃の前の少年のころにイラクから米国へやってきて、米国の高校を卒業後米軍の通訳としてイラクへ帰った。彼の人生行路は当時フロリダに住んでいたデニソンの人生行路と交差した。彼はミシガンに戻ってきた時に、ユーチューブでデニソンと知り合った。デニソンが死んだあとも二人の人生行路は今日まで交差しあっている。

2012年、デニソンは仲間の一人がテロ容疑で逮捕された後、ミシガンへ行って、ナセルといっしょに暮らし、その後にイラクへ行った。その年の後半にナセルはデニソンに会いにイラクへ行った。しかし、そのときのデニソンは ISIS や他のテロ・グループとの繋がりがなかった。

ナセルは米国へ帰国したとたん FBI につかまり、厳しい尋問を受け、厳しい監視下に置かれた。彼だけでなく、デニソンと接触した人間はみんな同じ目にあった。デニソンは本人が知らないうちに FBI の操り人形になっていたのだ。

FBI の調査によると、当時ナセルはデニソンが FBI の下働きだと誤解した。実際は、FBI はナセルをテロリストとして訴訟しようとしていたのだ。そして、ナセルはそのきっかけを FBI に与えた。彼は勤め先のコンビニで店長と喧嘩をした。未払い賃金に腹を立て、同僚店員にペッパー・スプレーをふりかけ、キャッシュ・レジスターから未払い賃金分の金を取った。それで凶器を使った強盗として逮

¹ これは、イスラム教に改宗し、ISIS の一員となったデニソンの物語で、カリフの府と言われる ISIS の内側が一目で分かる作品と言われる。

捕されたのだ。こんなことで FBI が動くのは普通はありえないが、FBI はナセルの家の家宅捜査令状をとった。通常予想されるように地元警察がとったのではなかった。私は州検事に取材して知ったが、家宅捜査で FBI が押収したものが、強盗とは全く関係のないものばかりであった。ナセルのパスポート、飛行機チケット、イラクで使ったタクシー運転手や宝石商の名刺、フロリダのデニソンの母親の電話番号が書かれた紙などを写真撮影した。ナセルは裁判で武装強盗の罪で 20 年の禁固刑を宣告された。しかし、FBI はそれでナセルに関して終わったわけではなかった。

デニソン・コネクション

私が初めてナセルに接触できたのは 2019 年、強盗罪で州立刑務所に服役していたときであった。彼は仮釈放されたのだが仮釈放違反で再び刑務所に戻っていたのだ。私は彼にデニソンが FBI の密告者ではなく、FBI に指名手配された ISIS 戦士だったと説明した。ナセルは「これで納得がいく。FBI が私に会ったとき、私を尋問したとき、私を襲って逮捕したとき、彼らはデニソンのことばかりを私に尋ねた」と語った。



シリアでのデニソン。インターセプトが入手した写真。

刑務所でのナセル取材と彼とデニソンとの関係の説明も『アメリカン ISIS』の中に入れた。それは 2021 年 7 月にリリースされた。私は、たぶんもうナセルと会うことはないだろうと思った。

その後、2022年11月、司法省はナセルを ISIS に物質的支援を行ったという容疑で起訴した。（彼は容疑を否認した）最初の起訴状は異常に薄い書面であった。ナセルがいつ、どのように ISIS に物資的支援をしたかという説明がなかった。ただ一つだけ明らかに思われたには、その起訴がデニソンとつながっていることであった。

私のナセルとの接触が再び始まった。2023年2月、私は電話でナセルを取材した。彼は州立刑務所からテロリストとして連邦刑務所に移されていた。私は16か月かけてナセルを電話取材し、それは11時間にわたった。私はそれを彼の裁判に関するオーディオ・ドキュメントにするつもりであった。しかし、電話取材を録音したのは私だけではなかった。司法省が電話を盗聴して録音していた。

喜んで情報を共有

「いいですか。この電話は盗聴され録音されていますよ」と起訴後の最初の取材のときナセルが言った。当時彼を有罪とするいくつかの証拠が提示されていた。秘密保持命令で証拠や記録が新聞記者など他者に渡すことが禁じられていたが、ナセルがそれを要約して私に伝えるのは可能であった。

最初の取材ではナセルは証拠なるものの中にはデニソンに関する極秘起訴も含まれていた。彼は次々と証拠なるものを突きつけられて訳が分からなくなり、私に電話で説明してくれと言った。司法省はナセルの私への電話が気に入らなかった。

2023年4月、連邦検事はナセルが私と「喜んで情報を共有している」と書いた書面を裁判所に提出した。2023年の審理では私とナセルの電話での会話が審問の中心となる焦点となったが、検事側は、秘密保持命令はナセルが自分の裁判で提出される証拠なるものについて私と話しすることを禁じていないことを認めた。2023年6月の審理では、連邦検事補のドミトリスラヴィンは「ナセルは情報を不適切な形で漏らしているのではない。何故なら、自分の裁判に関する情報と思ったものを彼がメディアに伝えることを制限することはできない。彼がメディアに情報を伝えるのを闘いのミッションとするのは妥当であるからだ」と述べた。

一時の間、司法省とナセルは我慢比べ状態となった。検事側は新証拠をナセルに提示するのを拒否し、ナセルは彼と私が話すのを禁じる修正秘密保持命令の受け入れを拒否した。

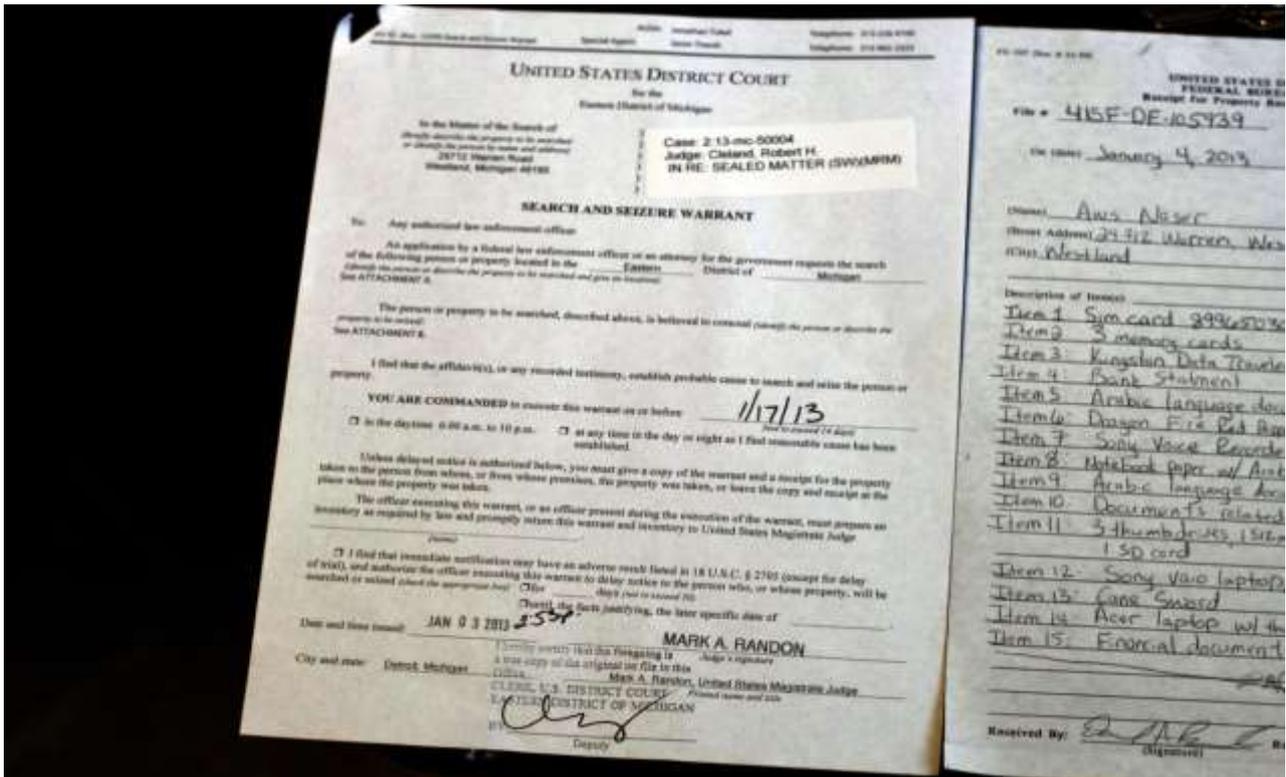
この間、政府のナセル起訴裁判は書面を裁判所に提出するだけで、ゆっくり進行した。検察側は、ナセルが政府のスパイも入っている過激派のオンラインフォーラムでイラクで金の商売人を殺害したと自慢する文を投稿した — 検察側はその証拠を持っているかどうかは不明 — とか、ナセルが ISIS のプロパガンダ・パンフレットや、ドローンや、家庭で使用する毒薬を持っていると主張した。

合衆国憲法修正第4条違反?

検察が提示した証拠なるものは、連邦当局が7年以上にもわたって、ナセルに対し、憲法が保障する権利を蹂躪してきたのではないかという疑惑を提起する。そして、人々を不当捜査や不当押収から守る憲法修正第4条違反がナセル起訴に関してあるのではないかと私が調査すると、司法省は私を攻撃するようになった。

しかし、FBIは何年間にもわたって捜査したにもかかわらず、ナセルに対して捜査令状をとれるほど強力な立件ができなかった。地方当局の管轄となって、ナセルは2016年に仮釈放となった。仮釈放中は保護観察官の観察対象となる。翌年、今まで会ったこともない保護観察官が彼を捜査した。ナセルの携帯電話を押収して、データを全部コピーしたのだ。保護観察官はそのデータを FBI に渡し

た。この保護観察官は数か月後にまたもやナセルのもとへ現れて、ナセルの二台目の携帯電話を押収して FBI に渡した。



ナセルの自宅に対する FBI の捜索令状 (州裁判所での Naser の強盗事件の証拠写真)。The Intercept が入手。

連邦当局は携帯電話からコピーした記録を、その後の 6 回にわたる捜査令状請求に利用した。ナセルの弁護団は携帯電話捜査を「FBI にとって、ナセルの憲法修正第 4 条の権利を長期的に抹消するための次善策だ」と表現した。弁護団は保護観察官と共謀して得た FBI の証拠物件を効力なしと封印する提訴をした。

4 月にナセルは私に電話をしてきて、連邦当局と保護観察官の間に取り引き関係があったことを話した。保護観察官の娘さんが性的被害にあったが、それが未解決のままだったので、保護観察官が FBI に協力する代わりに、性的事件を調査してくれと頼んだといういきさつがあったのだ。

「不適切な動機」

ナセルがこのことを私に話してから数週間後、弁護団は FBI と保護観察官の間の取引を公開せよという申し立てをした。これに対し、政府は私への攻撃で応じた。5 月 29 日、彼らは私が「不適切な動機」を持ち、公判前に「一方的」で「センセーショナル」な報道で「陪審員を偏見で染めている」と私と、私を起訴したのだ。司法省は「不適切な動機」の証拠として、「ナセルと アーロンソンは証人 (保護観察官) の家族に関する性的犯罪に目をつけて話し合い、それに関する背景の詳細を知って利用しようとした」と書いた書面を提出した。

検察が一番重要な核心をわざと外したのは言うまでもない。つまり、その性犯罪事件がナセルの憲法が保障する権利を無視したお返し取引の中心にあり、FBI がテロ捜査で警察や地域警察と組んでいるという大きな問題を含んでいるという点を隠ぺいしているのだ。なぜ司法省は、封印されている FBI の報告書の内容をそれほど気にしているのか。なぜ検察はジャーナリストを公然と攻撃しているのか。

司法省は、私がナセルとの会話やその他の取材活動で得ようとしている情報は公共の利益や関心のためではないと主張してきたし、6月25日の公判でもそう主張するだろう。しかし、それは明らかに嘘である。

ナセルのこの一部はすでに私のドキュメント・ポッドキャスト『アメリカン ISIS』とウォールストリート・ジャーナルの記者ブレット・フォレストの本『失われた息子：FBIの極秘戦争の罠にはまったアメリカ人家族』(Lost Son: An American Family Trapped Inside the FBI's Secret Wars)で扱われている。さらに、デトロイト・ニュースもナセルの裁判の経過を報道している。

もっと重要なことは、司法省の私への攻撃はFBIの証拠集めに関する公共の関心をかえって大きく高めた。なぜ司法省は、封印されているFBI報告書の内容を懸念し、その情報を入手しようとしていたジャーナリストを検察が公然と攻撃するのだろうか？

バイデン政権が本当に表現や言論の自由を守るつもりなら、ワシントンはデトロイトの地区検事局に厳しく訓戒するはずである。

私はナセル裁判に関する真実追求を続けるつもりである。むしろ私は私を攻撃することで世間の関心を高めてくれたとして、連邦検事に感謝すべきかもしれない。